皇子原

狹野神社を西に距ること約十町、前方高原の平野展開し、後には秀麗なる高千穗の峰が聳立し、地勢雄大の靈地である。その中心たる一丘阜の頂上に、兩石地中より出で相並ぶ所を神武天皇御降誕の靈蹟と稱し、古來尊崇して敢て近づくものがない。

宮の宇都

狹野神社の東半里、小流の傍一低丘がある、神武天皇御幼時の皇居の地と傳へ、附近に都街道の名を存してゐる。

狹野神社及び社家の古い記錄に依れば、神社の境域は北、蒲牟田川より南へ千間、又東西は二千間であつたと言ひ、神武天皇は御年十五まで此處に都し給ふたと傳ふるもので、狹野神社を含み、皇子原、宮の宇都を合せて、高千穗宮址狹野と申すのである。

附錄　一四　肇國日向の聖蹟

禊祓の聖地阿波岐原

宮崎市を流るゝ大淀川と北の方三里の石崎川を限りとし、市の西北一里餘の下北方から石崎川に連る丘陵の一線を開いた扇頭と見、大淀下流の蟹町を其要(カナメ)とした、略々三角形をなす三方三里の間を古來傳へて阿波岐原と稱し、市の東一里江田神社の海岸中ツ瀨を伊非諸尊の禊祓遊ばされた靈蹟と傳ふ。

日本書記の一書に依ると、こゝが天照大神の御降誕の靈蹟となつてゐることは洵に尊い限りである。

天孫御降臨傳說地

御降臨の諸說

一、天降說

我々大和民族の祖先が天より我が國土に降臨せられたと見るもので、我等の祖國高天原を神話と字義其の儘に解釋したものである、本居宣長の如きがそれである。

二、民族移動說

イ、國內說で、高天原を國內に在りとせるもの、大和說（山崎闇齋、谷重遠、河村秀根、伊勢貞丈）などの外、伊勢說（久米邦武）、常陸說（新井白石）等がある。

ロ、國外說、高天原を國外とせるもの、朝鮮說（藤井貞幹）、吳國說（林羅山）、其の他馬來說、滿洲說或は遠くバビロン、トルキスタン、ヘブライ、アルメニア等に求むるものもある。

ハ、土着發展說、日向臼杵郡高千穗を大和民族の高天原とし、國土統治の聖業に着手せられた時を以て前後に分ち、以前を高天原時代とし、以後を御降臨の世と見るもの（筧克彥）。

上代の神典たる古事記日本書紀以下に、御降臨の地を左の如く述べてゐる。

古事記　天の浮橋にうきしまりそりたゝして、筑紫の日向之高千穗之久志布流多氣に天降ります。

日本書紀の本文には

日向の襲之高千穗峰に天降ります。

同一書

皇孫則ち筑紫の日向の槵觸之峰に到ります。

同一書

故、天津彦火瓊々杵尊、日向槵日高千穗峰に降到ります。

同一書

日向の襲の高千穗槵日二上峰天の浮橋に到りて云々。

同一書

時に降到しゝ處を、日向の襲の高千穗の添の山の峰と呼曰ふ。

古語拾遺

筑紫の日向の高千穗の槵觸の峰に到りたまふべし、……天孫の降りますこと果して皆期れる如くなりき。

舊事記

筑紫の日向の襲の槵觸の二上峰に天降りましき。

風土記逸文（日向）

日向風土記に云く、臼杵郡の内知鋪郷、天津彦（彦）火瓊々杵尊（天の磐座を離れ、天の八重雲を排きて、稜威の道別ちわきて）日向之高千穗二上峰に天降りましゝ時、天晦冥くして晝夜別かず、人物通（道）を失ひ、物の色別き難かりき、こゝに土蜘蛛あり、名を大鉗小鉗と曰ふ、二人皇孫尊に奏言さく尊の御手もて稻千穗を拔きて籾として四方に投げ散らしたまはば、必ず開暗りなんとまをしき、時に大鉗等が奏せる如く、千穗の稻を搓みて籾となし投げ散らしたまひしかば、卽ち天開暗りて日月照光れり、因れ高千穗の二上峰と曰ふ、後の人改めて智鋪と號づく。（釋日本紀述義、仙覺萬葉抄註釋但し括弧内は釋日本紀にはなし）

神代傳説の原典は是等の外に出てないが、其の傳説地を是まで何處に取扱つて居るかといふに、

（イ）縣下西臼杵郡高千穗

（ロ）縣下西北兩諸縣郡高千穗峰

此外一部の人には、豐前説、薩摩金峰山説もあるが、一般には肯定されて居ない。

以上の高千穗、高千穗峰兩説は、古來論議されて今日に及び一向歸着するに至らない、夫等の所説は茲に一々擧ぐる事をしないが、中には眞摯の議論もあれど多くは各自の主觀により、且つ實査を經たるもの少く、或は單に信仰的にきめたものもある。

斯くて容易に決し難い問題である所から、本居宣長の如きは最初兩地の何れかに降り給ひ、他の地を經て

覓國(クニマヤ)して笠狹の地に到り給ふたもの、

（八）折　衷　說

を生ずるに至つた、平田篤胤の古史成父や、重野安繹の國史綜覽稿なども畢竟此折衷說である、斯くて天孫御降臨の地は我國史上最も大切な事であるにも關はらず、今日に至るまで何等權威ある定說にまで到達して居ないのは遺憾である、尙ほ諸縣高千穗說に就て附言して置きたいのは、高千穗峰は五合目以下の其西部が大隅と境してゐるだけで、全部日向內にあるから、天孫降臨の地が兩說のどちらであるに關はらず我宮崎縣內だといふことになる。

神代の山陵傳說地

明治廿八年十二月四日、陵發第一一號を以て、宮內省から、本縣に於て左の四箇所の御陵墓傳說地及び參考地を指定された。

北川陵墓傳說地（可愛(エ)ノ山陵傳說地）　東臼杵郡北川村大字長井

鵜戸陵墓傳說地（吾平ノ山ノ上ノ陵傳說地）　南那珂郡鵜戸村大字宮ノ浦

此傳說地は皇室陵墓令發布に當り參考地と稱することゝなつた。

男狹穗塚陵墓參考地　兒湯郡妻町大字三宅

女狹穗塚陵墓參考地　仝

此外縣內に於て地方的に唱へらるゝ傳說地は次の通りである。

可愛(エ)ノ山陵傳說地

宮崎郡木花村加江田靈山嶽（日州神社考）

延岡市字粟野名鞆內（延岡地方の傳說）

東臼杵郡南方村（神代卷鹽土傳）

高屋ノ山ノ上ノ陵傳說地

宮崎郡木花村久牟鉢(クムバチ)山上（日州神社考）

宮崎市村角町高屋神社境內（日向舊蹟見聞錄）

西臼杵郡高千穗町大字押方神塚山（高千穗舊記）

同　田原村大字河內水ノ神塚

吾平ノ山ノ上ノ陵傳說地

宮崎郡廣瀨村大字下那珂字吾平（里人の傳稱）

西臼杵郡高千穗町大字三田井字吾平（高千穗神跡明細記）

兒湯郡三納村字松本松本塚（里人傳稱）

南那珂郡油津町吾平津神社ノ山上（同）

（附　錄）

北川陵墓參考地　（傳說可愛山陵）

日豐線延岡驛より北二里餘

東臼杵郡北川村大字長井字倭野にある、墳形は圓で、高さ八尺周圍四十五間六分、松樹十數株其他雜木を生ずる、もと周圍に隍を繞らして居たが、寛政中（一說明治初年）大雨出水に際し之を埋め、陵も亦高さを減じたとある、此陵の記錄は存するもの少いが、前藩主内藤政韶が下臣をして調査せしめられた時、從來の說山上の自然石なりといふを排して、此墳を取られたのは卓見である、其後明治十六年宮内囂大澤清臣の調査報告は精核しかも簡にして要を得たものである、明治廿八年十二月四日宮内省陵發第十一號を以て北川陵墓傳說地に指定され、民有地百六十五坪を買收し監守を置かるゝ事になつたが、大正十五年皇室陵墓令出づるに及び、御陵墓參考地として御取扱を受くることになつた。

鵜戸陵墓參考地　（傳說吾平山上陵）

宮崎より南十里

鵜戸神宮境内に圍まれ海拔約百五十米の速日峰山上にある、山頂の所高さ四尺位に封土を盛りたる所がある、古來吾平山上陵なりとの傳說あり、飫肥藩士平部俊良之を日向古跡誌日向纂記等に說述したが、明治廿八年十二月四日宮内省陵發第十一號を以て御陵墓傳說地に指定され、官有地一反四畝五歩周圍九十二間七分を御陵墓傳說地に編入され監守を置かるゝ事になつた、後大正十五年皇室陵墓令出づるに及び、御陵墓參考地として御取扱を受くる事になつた。

御陵墓參考地男狹穗塚女狹穗塚

妻線妻驛の西北二十餘町

妻町西都原の東北に在る。

男狹穗塚は柄鏡式で南面し、鏡柄高さ三間一尺、幅廿一間、長さ六十一間、其前部及び側方は處々損壞してゐる。後圓部は高さ十間四尺、徑六十五間四尺、二重の段あり、全長百廿六間五尺、陵墓の周圍三百二十間、二重の隍を繞らす、内隍幅九間五尺、其堤高さ一間四尺、厚さ十一間、外隍幅十間三尺、其堤高さ三間二尺、厚さ二間三尺、外圍凡そ四百八十間、但し前面に於て内外隍及内外堤共に其形を有して居ない。

女狹穗塚は前方後圓で東南に面し、前方部高さ七間一尺、後圓部の高さ八間、二重の段あり、全長九十七間、繞すに隍を以てし、其幅廣き所十三間、狹き所八間、外堤高さ九尺、幅凡そ八間、クビレ部左右とも圓形の造り出しあり（以上の測定は中村文學士の調に依る）

明治廿八年十二月四日、宮内省陵發第十一號を以て御陵墓參考地男狹穗塚及び女狹穗塚として指定され、右合して兆域二萬千百四十九坪八合周圍六百八十四間を御陵墓參考地に編入され、監守を置て之を監せしめらるゝ事になつた。

（附　錄）

御陵墓參考地男狹穗塚は瓊々杵尊の御陵、女狹穗塚は木花咲耶姫命の御墓として當地にて古くより傳へ來り、應永中同町三宅神社の記錄に依ると、同社年九十七回の祭典中、三大祭の一に山陵祭あり、此陵前に於て祭典を執行し來つたとの事で、しかも右記錄は以前の記錄を寫せしものといへば、同時代よりは餘程古くより行はれたものと思はる、恐らく民間に於ける古墳祭のはじまりで以て此地に於ける祖先崇拜報本反始の美風を見る事が出來る。

日向の古墳

古墳は我上代に於ける皇族や高貴の方や乃至地方豪族の墳墓で、厚葬の習俗から塚を營みそれが後には横穴となり、地下式横穴などにもなつた、無論上層階級のもので、下層階級のものはこんな鄭重な塚など營まれた筈はない、型式上圓墳を最も普通とし、前方後圓墳之に亞ぎ其起原は遠く金石併用時代にありとされてゐる、其外方墳、上圓下方墳、塚の代りに丘腹等に葬つた横穴古墳、横穴を地下に應用した地下式横穴古墳もある。

是等古墳の日向に於ける分布を見ると全縣下の市町村に殆んど行き渡つて居り、全然ない所は三、四ヶ村に過ぎぬ、一番多い所は一ッ瀨川流域の妻町を中心とする各町村で妻の四百、新田の二百五十、富田、上穗北、三納、三財の各百内外、廣瀨の九十、佐土原の四十等が之に次ぎ、遙か上流の山地四米良にも數基あり此流域だけで日向古墳の約半數を占めてゐる、次は小丸川の流域で高鍋の二百五十、川南の百三十、木城の八十等であり。次は大淀川の流域で宮崎の四十、生目の百、瓜生野の百五十、住吉の百二十等があり、支流を上つて本庄の百、八代の五十等があり、山地を上つて北諸縣に出づれば高城、志和池、高崎の各三十等があり、支流岩瀨川の流域では小林、野尻等に相當分布してゐる、次は五ヶ瀨川の流域で延岡の八十、南方の八十、ずつと川を上つて高千穗の五十、田原の三十等がある、海岸地方は門川、富島、岩脇、美々津、都農に各二十内外、宮崎から南方は木花、青島、鵜戸、東郷、油津から細田、南郷、市木、都井、本城、福島の各町村に連續し福島は約三十で最も多く、大隅の志布志、串良へと續いてゐる。

以上日向を通じて二千二百基以上を算し、圓墳前方後圓墳が其大部を占めてゐるが、其中方墳は本邦に於て大和、河内、攝津、越前、關東地方に極少數しかないが、遙か西方に飛んで日向には六基ある、柄鏡式には前方後圓墳の一種であるが妻、本庄、南方(ミナミカタ)に多く、之が北は豐後の國東半島、西は肥後の阿蘇、南は大隅の高山まで延んでゐるが、日向が本場と見られ、又前方後圓墳の一種なる帆立貝式は川南、高鍋等にある。地下式横穴古墳は九州以外にもあるが、九州南部に多く、日向では新田以南諸縣、南那珂に分布し其遺物から見ると古墳末期の所產である。要するに日向の古墳は本邦のあらゆる古墳の各種類を全部持つてゐる、又是等古墳の型式は著しく大和地方のものに類似し、試みに西都の原や新田原の累々相並ぶ古墳上に立つてゐると大和平野のそれの上にあるやうな感じがして、場所の錯覺を起すことがあると考古學の先覺者の話にもあつた通りで、單に外形によつて見ただけでも著しく大和地方のものと似よつたものであり、上代文化の交

流をそこに見出されるといふ事である。

さて是等の古墳は無論神代に始まり、上代の終りである大化の改新前後に至るものであるが、日向ではもつと後までつづいてゐたことは唐式の八稜鏡が木脇村に出た事でも分る、古墳の中で三上の自然の地形を利用したもので小封土しかない圓墳から副葬品として直刀彌生式土器位を出すものは最も古い方でなければならぬが、宮崎、兒湯の丘陵上にそんな例はいくらもある。又古き遺物として知らるゝものには文政中今の南那珂郡福島今町の王の山古墳から出た穀璧蒲璧の玉の遺物の如きは支那周代の所産で、諸侯の爵位あるものの持物であり、全國の古墳に出土の一例しかなく、假令之を埋葬した時代が下るとしても、同時に出た遺物から推して古墳初期のもので、以て日向古墳中に古いものがあることを察知し得る。

斯の如く日向の古墳並に其の遺蹟物から見るときは今日の日向が古代日向の主體で、上代文化の中心地たることを如實に立證するものであると言はねばならぬ。

神代の聖蹟

高千穂

高千穂の地は日向の西北方に位し、日向古風土記の逸文には知鋪、續日本紀文德實錄には高千穂、神祇拾遺には單に千穂、和名抄には智保、日向圖田帳には高智尾莊、阿蘇大宮司家傳には知保鄉とあり、三田井岩

戸以下十七邑を總稱したのであるが、南北朝合一後肥後の鞍岡村を加へて十八邑となり、東西十里、南北二十里の間を稱し、天孫御降臨傳說地の一である。

山嶽重疊の間、東南三田井より西北田原まで五里四方に亙る廣大なる原野あり、東南に槵觸峰、南に二上山諸塚山あり、北に祖母嶽あり、峨々たる高千穂の連峰此の盆地を圍繞し、五ヶ瀨川衆水を集めて東流し天下の絶勝高千穂峽を作り、盆地の臺上には幾多の村落があり、千木を置いた昔乍らの萱屋根は古代の建築を其儘に傳へ、民風土俗上代の俤を殘してゐる、二上の峰槵觸天の眞名井をはじめ幾多の名蹟がある。

高千穂峰

都城平野の西方に聳ゆる秀靈の山である、山と其の裾野一帶は天孫御降臨傳說地の一である、莊嚴崇高の山容、雲霧嶺を沒し、快晴霽れば群峰を從へ、山裾めぐる山水の雄大さは「鍾得秀靈氣天工盡于此」の概があり、永遠に敬虔の情を感銘せしむるものがある、古來國人の崇敬する所で、御天上嶽、又は「御高う」と稱してあがめ來つた。

山は其の支峰御鉢の西側を以て鹿兒島縣に界し、全部本縣内にあり昭和八年鹿兒島縣に屬する霧島諸峰と共に霧島國立公園に指定されてゐる。

久牟鉢（クムバチ）及び靈山嶽

宮崎郡木花村　宮崎より南三里

木花村加江田川の南方は一帶の山脈西より來り、蜿々として東、青島の對岸に盡きてゐる、久牟鉢山（勘

鉢又供鉢にも作る）は、主峰「トクソ」より續く一峰で、頂上は嶮峻であるが頗る景勝の地である。こゝに彦火々出見尊を祀る小社があり、社殿の背後圓形の封土のある所を尊の御陵であると傳へ、又山を八合目まで下りて東方に行けば靈山嶽で、そこにも封土を存し、瓊々杵尊の御陵であると傳へる。

木花　宮崎郡木花村

宮崎より二里餘青島へ行く道筋に木花村がある、木花の小臺地が村の中央にあり、東、太平洋を望み、あたりは渺々たる平田に接し、加江田川、南方を流れて景勝の地である、臺地の一端に櫨現社がある、附近は瓊々杵尊の皇居址と傳へ、社は木花開耶姫命を祭つてゐる、社に向つて左方に縦四間、横二間の地、松を中心に樹木群生せる所を無戸室址と傳へ、古來神聖視して入ることを許さない、又社から北方に行き其東側の坂路を下れば東西一間、南北二間程の小池がある、之を櫻川と呼び、木花開耶姫命の産湯をつかはされた御跡と傳へる。

加江田は可愛（エ）の訛といひ、木花村は天正十九年の郷村帳には木原村とあるが、木花開耶姫命の傳説より生じた名であるといつてゐる。

在此入道記事（伊東三位入道飫肥紀行）

赤井の里に船漕ぎよせて稲荷の山を過行けば、（中略）猶行路遥けきに木花の寺も見えければ、木花開耶姫の御神靈もまのあたりに覺えつゝ急ぎけるに、漸々入日に成て折生迫と云所につきにけり。

一宮巡詣記

熊野原を行過、タサシと云所を通りけるに入海廣く見へたり、（中略）左かた海こしに吾田山后原（キサキ）にて木花開耶姫の出給ひし所見ゆ、少し隔てゝ櫻川有沖の方にシタの島見ゆ。

櫻川瀬々の白波しげければ
ほのかに見ゆるしたの浮島

無戸室　妻線妻驛より北西十餘町

妻驛より西都の原への縣道を西北へ十數町行けば道路の右方巨樹下玉垣を繞らせる百坪許の所を無戸室といふ、木花開耶姫命の産殿の御址と傳へ、命は此處にぬりごめの産殿を造り給ひ周圍に火を放つて其中で皇子火降闌命以下三皇子を擧げ給ひ、貞淑潔白を證ぜられたと申し傳ふるのである、境を接して御父君大山祇命を祀る石貫神社がある。

子湯の池　妻線妻驛より北西約十餘町　兒湯郡妻町

前の無戸室から西南へ半町許り西都原への新道左側にある、雜木を繞らし廣さ五六畝許り、土地では洗子（アレンコ）と呼んでゐる。

木花開耶姫命は無戸室で三皇子を御擧げになつて此池で産湯を御遣ひになつたと傳ふる、子湯の縣兒湯郡の名は此傳説から起つたのだといふ、附近一帯は穢い沼地であるが、此池ばかりは年中絶えず眞清水が湧い

（附　錄）

てゐる。

此附近には瓊々杵尊が木花開耶姫命を初めてみそなはした逢初川や、姫の爲に御建てになつたといふ八尋殿の跡など幾多の傳說地がある。

八尋殿の跡は字妻圍にある、木花開耶姫命を御祭りしてある、都萬神社に最近まで屬してゐた、姫が御入内後湯沐の邑として御定めになつた所と傳へる。

米良の小川

妻線杉安驛より縣道を西へ八里更に右折して小川へ二里　兒湯郡西米良村

西米良村小川に鄕社米良神社あり、大山祇命及び磐長媛命を奉祀する、本殿は拜殿と川を隔てゝ鬱蒼たる丘上の社叢中にある、社の左右に眞名井田畝圍等の地あり、往時の神田と傳へ、なほ其西數町に石神田といふがある、磐長媛命は瓊々杵尊の御召に與らなかつたのを耻ぢ、今の甕北の笹の丸から龍房山を經て、尙奥深く此地に入り給ひ、一切を超越して山に畠に自ら耕作し秀々として黃金の波漂ふ時、言ひ知れぬ笑をもらし給ひ、ヨネニシ〳〵（米良し）と御喜びになつた、米良の名もこれから起ると言つてゐる、尙ほ命を御祀りしてゐる神社は東米良の銀鏡神社の外縣下の各地大將軍（アリヨコン）と稱する神社は、大方命を御祀りしてゐる社である。

山幸海幸

宮崎郡青島村

瓊々杵尊の皇子火闌降尊は、海幸彦と稱し漁撈に長じ給ひ、弟君彦火々出見尊は山幸彦と稱し狩獵に長じ

て居られた。

或日兄君の火闌降尊は、弟の君に向つて海と山との幸を交換して見やうではないかと言はれ、弓矢と釣鉤とをかへて見られたが、俄に仕事を異にせられたのであるから、よい結果の得られる筈はなく、弟君の方は釣鉤を魚に取られて御仕舞になられた、そこで弟君は新しい釣鉤を作つて返されたが、兄君は承知がない、依て腰に佩いてゐる十握劍を打ち碎いて五百本の釣鉤を作つて返されたが矢張承知がない、今度は千本の釣鉤を作り、大きな箕に入れて持つて行かれたが兄君はいつがな承知がなく、飽く迄も元の釣鉤を返せと責め立てられた。

弟君は今は全く御困りになつて、如何にせば元の鉤が返せるかと海濱に出てそのあたりをさまよつて居られると、鹽土翁（ツチノヲヂ）がそこに現はれ、事の次第を聞いて氣の毒に思つて、無目堅間といふ竹船を作つて、命を其船に乘せ海神の國に御送り申し上げた。

尊は海神國に三年も御出でになつて、海神豐玉彦の女豐玉媛命を御娶りになり、海神の助けによつて赤女（鯛魚の一種　又は鯛といふ）の口中から失つた釣鉤を得て歸宮されることになつたが、海神は尊に潮滿瓊潮涸瓊を與へられ、そして言はるゝには、若し兄君が危害を加へらるゝやうな事があらば、潮滿瓊を以て溺れさせなさい、兄君が悔ひ過まるゝ事あらば潮涸瓊を出して救ひなさいと申された。

尊がいよ〳〵出發されるとなると、海神は一尋鰐をして一日中に御送り申上げられました。

兄君火闌降尊は弟君の御歸りを見て心中甚だ安からず思はれて急に之を失はうとされたが、尊はかの二つの瓊を御出しになつて兄君を全く降伏させられた。

（附　錄）

兄君は狗吠をなして宮門を守る隼人族の祖先だと傳へられ、人皇の世まで隼人の番上が續けられることになつた。

宮崎郡青島は古く淡島といひ、又齒朶之浮島といはれてゐた、齒朶之浮島は埴土の翁が彦火々出見尊を目無の籠に齒朶の葉を敷いて海神の國に送りまゐらせたといふ古傳說に出たものといはれる、又青島の島陰深く鎭座ます青島神社は尊と豐玉媛命埴土翁が祀られてゐる。

斯くて山幸彦の尊と、海幸彦の火闌降尊が業を御取かへになつた傳說の地は、青島村と此青島に殘されてゐる。

鵜戸の產屋

南那珂郡鵜戸村

鵜戸の窟は鸕鷀草葺不合尊の御降誕の所と傳へ、彦火々出見尊の海神の國より御歸りになつたあと、御懷胎であつた豐玉媛命も直ぐに御出でになつたが、尊が鵜の羽根を以て葺草（カヤ）とし產屋を造つてゐられますと、まだ葺き合へぬうちに產氣づかれて皇子が御生れになつた、それで皇子の御名を鸕鷀草葺不合尊と申上た。豐玉媛命は產屋を御覗きにならぬやう堅く約束申上げられたのを、尊が御まもりにならなかつたといふ事から海神國へ御歸りになつて仕舞はれたので、御妹の玉依姬命が代つて御養育になり、御乳の代りに飴を造つて御上げになつたと傳へ、今も鵜戸の御乳飴を賣つてゐるのは此傳へに傳るのである。

串間

南那珂郡北方村

志布志線日向北方驛より三丁

北方村串間神社は串間に鎭座し、彦火々出見尊を祀る、古く穗櫛の宮と稱ふ、傳へ言ふ櫛間のめぐり四方の連山、狩場の防ぎ外仙に勝りて、所在の獸最も多し、故に尊笠狹の宮より此處にお遷ひ來まし、山幸を御業とし假宮を置かせ給ふたと、串間卽ち櫛間の名義は櫛木は瓊々杵尊以來の御愛木、間は塊を限るの義、串間は斯の如く尊の御狩場であつたので、同地では近代まで御祭り狩と稱へ、各村受持の山狩倉の定めがあり毎年師走十三日より翌年睦月初酉丑卯辰申五ヶ日を以て御狩祭を行つてゐた。

宮圖、火の舞谷

南那珂郡福島町

志布志線福島仲町より四十餘町

彦火々出見尊龍宮より國土に就かせ給ひ、やがて國內を巡幸し給ひ、今福島町大字西方の宮圖に勿體（モッタイ）の森がある、尊の行宮址だと傳へ、址に尊を御祀りする勿體神社がある、又其西南數町に火の舞谷がある、神社の祭式には今尙ほ古例に依つて踏火（ヒフミ）の式を行つてゐる。

潮嶽神社

南那珂郡北鄕村

志布志線北鄕驛より南三町

北鄕村宿野に潮嶽神社がある、火闌降命外二神を祀る、此地火闌降命の舊跡を傳へ、大塚、磯石、樫木山神池、饗の塚、船子山、船巖、越潮山、潮越、魚見の瀧等の名蹟を存ずる、命を奉祀してゐる神社は、鹿兒島神宮の相殿に祭れるやうな例はあるが、本殿に奉祀してあるのは本社で尊い次第である、當地方の慣習として縫針の貸借を禁じてゐるのは、海幸山幸の傳說から來たもので、產兒の初詣には額に紅を以て犬といふ

（附錄）

字を記し、又驚風病の呪の歌に

みどり子の額の髪をかきわけて
犬といふ字は弓の矢の筈

とあるのは、命の宮庭奉仕の儀に依つた古俗であらう。

玉依姫命御墓

南那珂郡鵜戸村

鵜戸の北一里餘

鵜戸神宮の北一里餘に宮の浦の部落があり、そこに玉依姫命を祀る宮の浦神社がある・社側より小溪を南西へ上る事八丁許の所に、傳説玉依姫命の御墓がある、高さ二間四尺、周圍一丁許、そこに生ずる草を牛馬に食はしむれば忽ち腹痛すと稱し、古來畏れ虔んで今日に及んでゐる。曩に御東遷祭に當り、周圍に玉垣を繞らし拜所を設け且つ參道を開いた。

西都原古墳群

兒湯郡妻町

妻線妻驛より西二十町

妻町妻驛より都萬神社の側方を西南に進み人柱傳説に名高い稚兒の池を右に見て坂路を上れば西都の原である、西に米良一帶の山岳を望み、眼下に妻平野を控へ廣袤一里の臺地上古墳無慮三百五十を數へる。

日向の古墳は現存するのみにて約二千二百基に達し、其内兒湯郡約半數を占め當町に於けるもの他の西原清水祇園の上等を合すれば四百以上に達する、斯の如きは全國を通じて外に例なき所であり、此地が上代久しく日向の中心地たるを知るべきである。

臺地上古墳の分布は其北方に位置して、御陵墓參考地男狹穗塚、女狹穗塚がある、河内の大山陵に亞くべき大古墳である（別項參照）墳を圍みて南に鬼の窟の圓墳がある。陸の外、疊を繞らせるもので類を他に求むれば本郡新田の彌九郎塚、同三財村の方墳の外、縣外では河内の磯長に其一例あるのみである。北方に飯盛雜餉の二塚がある、共に圓墳として偉大なるもの女狹穗塚の西に接する方形墳は埴輪を廻らしたもので、近畿地方の同式墳が支那交通の影響を受けたものよりは稍古く、或は日向に發達した特種のものであらう。男狹穗塚の北東原野中には圓墳累々相並び夫より南して臺地の緣邊には前方後圓墳、圓墳大小散列碁布し、南方の小臺地國分附近女狹穗塚の西方寺原附近、臺地北方の平野又小群集地を見る。

西都原古墳は明治四十五年以後、東西兩大學、宮内省等より斯道の大家を聘して數回に亘り之を發掘し、學術的調査を試み、本邦考古學上一時期を劃する偉大の効果を收むることになつた。

附記　西都の原はもと齋殿（サイトノ）原ともいひ（妻宮縁起書）西都農原となり、遂に西都の原となつた、三宅神社を西都濃神社といつた如きこれを證する、さいとばる、さいとがはら、などいふは當らぬ。

史蹟名勝天然紀念物

○本指定

種別	名稱	所在地
史蹟	千畑古墳	兒湯郡上穗北村大字穗北
〃	西都原古墳群	〃　郡妻町大字三宅
〃	宗麟原供養塔	〃　郡川南村大字川南
〃	中ノ尾供養碑	南那珂郡東郷村大字殿所
〃	本庄古墳群	東諸縣郡本庄町
〃	今町ノ一里塚	都城市、北諸縣郡中郷村
天然紀念物	青島熱帶性植物產地	宮崎郡青島村大字折生迫
〃	都井岬蘇鐵自生地	南那珂郡都井村大字御崎
〃	海棠自生地	西諸縣郡〃加久藤村大字西永江浦
〃	狹野杉並木	〃　郡高原町大字末永
〃	闕ノ尾甌穴	北諸縣郡庄内町大字闕ノ尾
〃	高島ノ蒲葵自生地	東臼杵郡北浦村大字宮ノ浦

〃	古江ノ金木犀	〃　郡北浦村大字古江
〃	七折鍾乳洞	西臼杵郡七折村字南
〃	拓ノ瀧鍾乳洞	〃　郡高千穗町大字向山
〃	幸嶋猿棲息地	南那珂郡市木村幸嶋
〃	かもしか	主ナル棲息地　宮崎外十一縣
〃	狹野神社佛法僧蕃殖地	西諸縣郡高原町大字蒲牟田
〃	青島村ノ隆起海床ノ奇狀波蝕痕	宮崎郡青島村大字折生迫
〃	日向夏蜜柑原樹	〃　郡赤江町
〃	八村杉	西臼杵郡椎葉村
〃	高岡月知梅	東諸縣郡高岡町
〃	去川ノ公孫樹	〃　郡〃　町
〃	湯ノ宮座論梅	兒湯郡新田村
〃	內海ノあかう	宮崎郡青島村
〃	內海ノやつこさう發生地	〃　上
〃	本庄ノいちゐがし	東諸縣郡本庄町
名勝天然紀念物	高千穗峽	西臼杵郡高千穗町
名勝	妙國寺庭園	東臼杵郡富島町細島

種別	名稱	所在地
仝	行縢山	仝　郡南方村
仝	乙島	仝　郡門川町
仝	橘口氏庭園	兒湯郡美々津町
仝	寺岡氏庭園	南那珂郡飫肥町
仝	比叡山及矢筈岳	〃東臼杵郡北方村 〃西臼杵郡七折村
史蹟	上江古墳群	兒湯郡高鍋町
仝	新田原古墳群	仝　郡新田村
仝	茶臼原古墳群	仝　郡上穗北村
仝	川南古墳群	仝　郡川南村
仝	東麓石窟佛	西諸縣郡野尻村
仝	キリスト教徒碑	延岡市
仝	石器時代遺址尾平野洞窟	北諸縣郡中郷村
天念紀然物	石樋	東諸縣郡本庄町
仝	榎	延岡市

○縣指定

史蹟	赤江町古墳	宮崎郡赤江町
仝	都井村古墳	南那珂郡都井村
仝	福島町古墳	仝　郡福島町
仝	市木村古墳	仝　郡市木村
仝	都城市古墳	都城市
仝	志和池村古墳	北諸縣郡志和池村
仝	野尻村古墳	西諸縣郡野尻村
仝	眞幸村古墳	仝　郡眞幸村
仝	須木村古墳	仝　郡須木村
仝	綾町古墳	東諸縣郡綾町
仝	倉岡村古墳	仝　郡倉岡村
仝	都於郡村古墳	兒湯郡都於郡村
仝	富島町古墳	東臼杵郡富島町
仝	高千穗町古墳	西臼杵郡高千穗町
仝	安井息軒宅址	宮崎郡清武村大字加納

種別	名稱	所在地
仝	古月禪師分骨塔	仝　郡佐土原町大字上田島
仝	何欽吉墓	都城市鹿尾町
仝	榎田闕址	西諸縣郡加久藤村大字榎田
仝	伊東塚	仝　郡小林町大字眞方
仝	去川ノ關址	東諸縣郡高岡町大字內山
仝	刀工田中國廣宅址	仝　郡綾町大字入野
仝	本庄ノ石佛	仝　郡本庄町大字嵐田
仝	谷村計介舊宅	仝　郡倉岡村大字糸原
仝	國分寺址	兒湯郡妻町大字三宅
仝	南洲翁寓居址	東臼杵郡北川村大字長井
仝	幕末勤王家海賀宮門外二士墓	仝　郡富島町細島大字平場
仝	吉野朝勤王家柴原又三郎ノ墓	西臼杵郡高千穗町大字西方
仝	甲斐右膳父子ノ墓	兒湯郡西米良村大字越野尾
仝	觀吉御所址	仝　郡　仝　所
仝	佐土原町古墳	宮崎郡佐土原町
仝	青島村古墳	仝　郡青島村

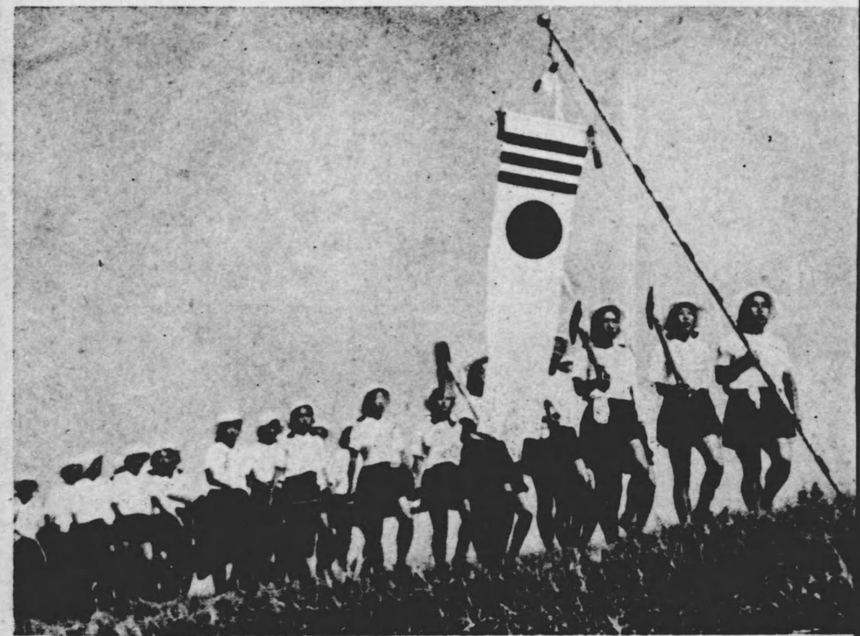
仝	高城町古墳	北諸縣郡高城町
仝	飯野町古墳	西諸縣郡飯野町
仝	三納村古墳	兒湯郡三納村
仝	東郷村古墳	東臼杵郡東郷村
仝	西郷村古墳	仝　郡西郷村
仝	岩戸村古墳	西臼杵郡岩戸村
仝	七折村古墳	仝　郡七折村
仝	田原村古墳	仝　郡田原村
仝	沖水村古墳	都城市沖水
仝	八代村古墳	東諸縣郡八代村
仝	妻町清水、西原古墳	兒湯郡妻町
仝	細島町古墳	東臼杵郡富島町
仝	西米良村古墳	兒湯郡西米良村
仝	南郷町古墳	南那珂郡南郷町
仝	山之口村古墳	北諸縣郡山之口村
仝	紙屋池之原一里塚	西諸縣郡野尻村
仝	紙屋漆野原一里塚	仝　郡仝　村

種別	名稱	所在地
史蹟	水脇村古墳	東諸縣郡木脇村
仝	三財村古墳	兒湯郡三財村
仝	都農町古墳	仝　郡都農町
仝	舊藩都農牧駒追込場（笠遺址）	仝　郡仝　町
仝	有栖川征討總督宮殿下（御本營遺蹟）	東臼杵郡富島町細島
仝	門川町古墳	仝　郡門川町
仝	三ヶ所古墳	西臼杵郡三ヶ所村
仝	宮崎市大淀古墳	宮崎市大塚町
仝	那珂村古墳	宮崎郡那珂村
仝	清武村古墳	仝　郡清武村
仝	木花村古墳	仝　郡木花村
仝	油津町古墳	南那珂郡油津町
仝	東郷村古墳	仝　郡東郷村
仝	細田町古墳	仝　郡細田町
仝	本城村古墳	仝　郡本城村
仝	高鍋町古墳	兒湯郡高鍋町

種別	名稱	所在地
史蹟	岩脇村古墳	東臼杵郡岩脇村
仝	北方村古墳	仝　郡北方村
仝	美々津町古墳	兒湯郡美々津町
仝	木城村古墳	仝　郡木城村
仝	延岡市古墳	延岡市
仝	川南村古墳	兒湯郡川南村
仝	廣瀨村古墳	宮崎郡廣瀨村
仝	住吉村古墳	仝　郡住吉村
仝	本庄町古墳	東諸縣郡本庄町
仝	小林町古墳	西諸縣郡小林町
仝	庄内町古墳	北諸縣郡庄内町
仝	宮崎市下北方古墳	宮崎市
仝	美々津町古墳	兒湯郡美々津町
仝	佛日要ノ墓	東臼杵郡富島町
仝	佛日講遺蹟	宮崎郡佐土原町
天然記念物	鵜戸千疊敷奇岩	南那珂郡鵜戸村大字富濱
仝	オニバス自生地	兒湯郡木城村大字椎木

種別	名稱	所在地
全	福壽草自生地	西臼杵郡高千穗町大字向山
全	飫肥金木犀	南那珂郡飫肥町
全	飯野の銀杏	西諸縣郡飯野町
全	山陰ノ石櫧	東臼杵郡東郷村
全	三股ノ松	北諸縣郡三股村
全	八代ノせんだん	東諸縣郡八代村
全	船引ノ大樟	宮崎郡清武村大字船引
全	森ノ化石群	東諸縣郡本庄町
全	美々津ノおがたマ	兒湯郡美々津町
全	北浦ノおがたマ	東臼杵郡北浦村
全	山田銀杏	北諸縣郡山田村
全	大東ノ犬槇	南那珂郡大東村
全	門川ノ金木犀	東臼杵郡門川町
全	瀨頭ノ松	宮崎市
史蹟及天然記念物		

祖國振興隊



振興隊ぶし

（一）
皆さん皆さん
日向の空に
ヒラ〳〵するのは
何ぢやいな
〳〵トコトンヤレ
トンヤレナ

（二）
あれは祖國を
振興せんとの
誓ひの御旗と
しらないか

（三）
天孫降臨
神武の天業は
此地におこるを
しらないか

（四）
忠勇義烈の
祖先の血潮は
我等の胸に
沸きかへる

（五）
おきよ〳〵
勤勞倍加だ
躍進日本の
たゞなかに

（六）
東洋平和の
皇國の使命に
仇なす怒濤も
何のその

祖國振興隊信條

一、我等ハ皇祖發祥ノ聖地ニ生レ天業翼賛ノ皇民ノ裔タルニ感激ス

一、我等ハ盡忠報國ノ精神ニ滿チ義勇奉公ノ赤誠ニ燃ユ

一、我等ハ勤勞ヲ倍加シ誓ツテ祖國振興ノ柱石タラン

祖國日向振興朗誦文

第一章

日出づる國に靈境あり、天高く地廣く、山河秀麗、民情醇なり。

畏くも、諸尊禊祓の濱、波は太古の響を傳へ、

忝くも、天孫降臨の地、風は上代の調に通ふ。

養正・積慶・重暉の神德、宣揚ぜられし皇道樂土、三世の神迹昭々として、一土一水悉く、聖史と榮光とに輝く古帝州。

謹み惟ふ。甲寅の歲冬十月、神武大帝東遷して、萬古不易の皇基を樹て給ふ。その宏謨を翼贊し、その聖戰に參與せし、純忠至誠の國人。

そが熱血を享け繼ぎ、そが精魂を傳へたる吾等日向若人。

巍々、雲に聳ゆる霧島山、崇きは卽ち吾等が姿。

洋々、空を浸す日向灘、浩きは卽ち吾等が心。
げに、日向こそ、神州日本の祖國。
吾等こそ、大和民族の精粹。

第二章

朝日直射す國。
夕日の日照る國。
山幸、海幸限りなき國。
何ぞ、この無上の沃土を耕さゞるや。
何ぞ、この無盡の天惠を取らざるや。
勤勞は生あるもの〻欣求にして、又若人の歡喜なり。
流汗淋漓。勤勞倍加。

炎熱鑠を鎔かす夏の日も、孜々としてこれ勉め、
冱寒肌を擘く冬の日も、役々としてこれ勵む。
尊き哉その姿、壯なる哉その心。
聞け。曉の鐘は、吾等の惰眠を破りて殷々たり。
日向ふ國の若人。いざ
鍬取りて野に出でよ。
斧擔いで山に入れ。
網持ちて海原渡れ。
鐵槌執りて場に行け。
牙鑄携へ市に立て。
耕し、商ひ、工みするにも、常に科學の理に基き、經驗の則に隨ひ、おのが向き向き工夫
創造し、積極進取、勵め倦まずば、無限の物資自ら集まり、天與の恒産期せずして積ま

れん。

かくて、人足り、戸々潤ひ、鄕邑みな豐かならば、國富み兵强く、以て、皇運を無窮に扶翼し奉るを得ん。

第三章

天業恢弘、天下光宅。これ祖宗肇國の大理想。

國際正義。世界平和。これ大和民族の大使命。

開闢以來、生成發展、この理想を實現し、この使命を遂行す。日東帝國の前途を祝福せよ

長くも、皇祖發祥の聖地に生れ、天惠無盡の樂土に住む。

吾等、何等の光榮ぞ、何等の幸福ぞ。

願はくば、吾等、祖先忠烈の遺風に因りて、發憤勉勵、誓つて更生日向の先驅たらん。

願はくば、吾等、祖國山河の靈氣に賴りて、精進努力、盟つて新興日本の柱石たらん。

祖國振興隊數並隊員數

（昭和十七年三月一日現在）

	中等學校隊	國民學校隊	男子青年隊	女子青年隊	一般隊	合計
隊數	四五	二六〇	一八四	七七	一四四	七一〇
隊員數	一四、五四二	七一、九三八	三九、三四八	一三、四八三	七四、六八二	二二、九六三

雜

錄

宮崎の參宮と

觀光には

宮崎の參宮と御觀光には、何を措いても先づ宮崎バスの參宮バスを御利用下さることが一番御便利で御座います。

參宮バス婦人案内人の明朗懇切なる説明振りは既に定評が御座います。神の國、美の國、而して新しい國日向を語つて十二分であるばかりでなく、恍惚として旅の疲れを御忘れになるほどのサービス振で御座います

宮崎參宮バス經濟乘車券は全國のブーリスト・ビユローで發賣致して居ります、どうぞ御利用下さいませ

參宮バス御案内

參宮と觀光コース

宮崎神宮、市内見物、青島、鵜戸神宮の順序で、所要時間七時間餘で御座います。團體樣の場合は御豫定により如何樣にも變更致します。

出發箇所　九州日豐鐵道宮崎驛前　宮崎バス株式會社（本社）

本社發時間	參宮及觀光箇所	料金	歸着時間
午前八時〇〇分	宮崎神宮…青島…鵜戸神宮	三円六〇錢	午後三時三〇分
仝　八時三〇分	宮崎神宮…青島…鵜戸神宮	三円六〇錢	仝　三時三〇分
仝十　時三〇分	宮崎神宮…青島…鵜戸神宮	三円六〇錢	仝　五時三〇分
午後一時〇〇分	宮崎神宮…青島…鵜戸神宮	三円六〇錢	仝　七時三〇分

宮崎の名産品

古い國だが、新しい街なので、土産品も新しいのが次ぎ〳〵に現はれて來る。今日現はれてゐる格好のものは……

御菓子類　搗入餅、椎茸羊羹、夏みかん羊羹、橘もなか、橘ボーロ、祖國せんべい、夏みかん飴、神國だんご、山茶羊羹。

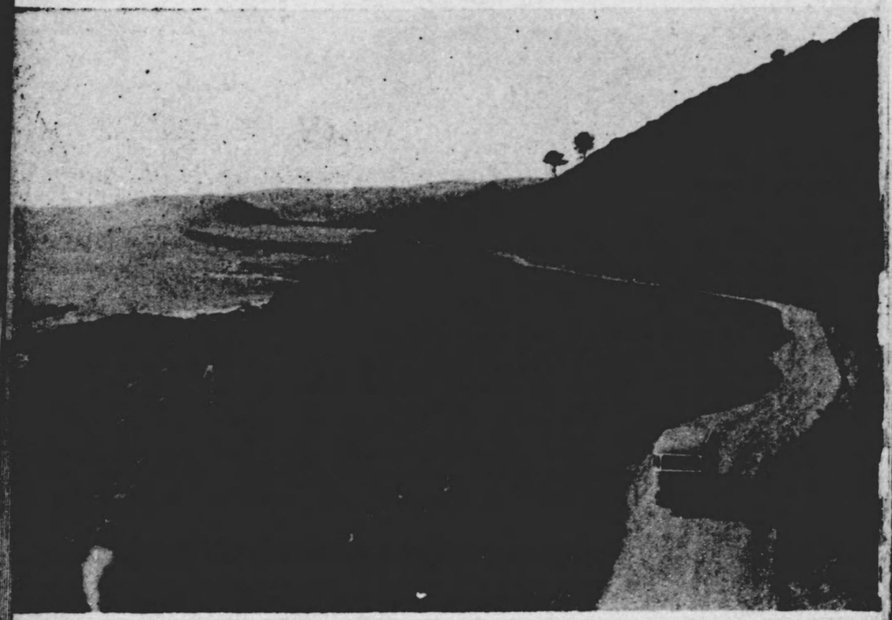
果物　隨一は日向みかん。その他にもいゝ果實が多く、殊に季節の早いのが珍らしい。千いちぢく。

飲料　セービス、銘酒初御代、いちぢくコーヒー。

木・竹工品　林產國日向にふさはしい樫の御盆、茶托、菓子器、ステッキ、洋服掛、箸、揚子、花瓶、花籠、煙草セット、ホーク、ナイフ、ビロー細工。

郷土玩具　彈き猿、登り猿、法華嶽鶉、久峰鶉、青島雛、佐土原人形、日向駒、しゃん〳〵馬

其他　祖國漬、日向漬、椎茸、乾鮎、綠茶、うに、錫製品、香油、祖國の華、神都漬、宮崎漬、紅溪石硯、碁石、碁盤、おほつどらふぢ。



道の へ宮神戸鵜

宮崎より鵜戸神宮へ走る參宮バス。曲折蜿蜒數里、白波車窓に散り大平洋の壯觀送迎に遑なし。

寫眞は內海峠附近、下方海岸に沿ひ內海港に通ずる輕鐵線路あり。

馬ンヤシンヤシ

昔宮崎地方の若者達は新妻を迎へると、夫婦はわらじ脚絆の裝ひで、相携えて七浦七峠を越へて鵜戸神宮詣りをすることを慣習としてゐた。

歸り路には親族一同が途中で出迎へ、花嫁には盛裝させ鈴を付けた馬に赤毛布を敷いて乘せ、新郎はその手綱を取り、シヤン、シヤンと鈴の音も樂しく我が家へ歸るのであつた。

日向の新民謠

祖國日向

（元宮崎時事新聞社編）

作歌　西條八十
作曲　中山晋平

神の高千穗　光の岩戸
沖の(マタ)黑潮　天まで溢ふ
日向(サイサイ)よい國　日本の祖國
意氣と(マタ)男の　住むところ
ヨイノヨイトコ　ドツコイセ
ドツコイセ　トコ　ドツコイセ

名さへ宮崎　神武の宮を
繞る(マタ)都は　輝く伸びる
川も(サイサイ)大淀　橋橋は
（雜　踏）

夜も(マタ)花咲く　人通り
ヨイノヨイトコ　ドツコイセ
ドツコイセ　トコ　ドツコイセ

日向瑠璃空　火のよに染めて
春を(マタ)知らせる　霧島つゝじ
裾野(サイサイ)千里の　若草踏んで
風に(マタ)いなゝく　放れ駒
ヨイノヨイトコ　ドツコイセ
ドツコイセ　トコ　ドツコイセ

浮ぶ青島　びろう樹のかげで
ところり(マタ)見ましよか　異國の夢を
南(サイサイ)風吹きや　海原ながめ

日向(マタ)乙女の　目も燃える
ヨイノヨイトコ　ドツコイセ
ドツコイセ　トコ　ドツコイセ

日向小唄

(元宮崎時事新聞社編)
作歌　西條八十
作曲　中山晋平

(ヨイショ〳〵〳〵ナ)
おらが高千穂　(ヨイショナ)
おらが高千穂　こゝから射した　(ヨイ〳〵)
日本夜明けの日の光
(テサテ　サテ〳〵日の光)
(エーエ　日の光　サテモ　ションガエ)

(ヨイショ〳〵〳〵ナ)
鏡延岡　(ヨイショナ)
鏡延岡顔都城　(ヨイ〳〵)
日向むすめの晴化粧
(テサテ　サテ〳〵晴化粧)
(エーエ　晴化粧　サテモ　ションガエ)

(ヨイショ〳〵〳〵ナ)
雪が降るのに　(ヨイショナ)
雪が降るのに櫻が見える　(ヨイ〳〵)
あれはお國か日向灘
(テサテ　サテ〳〵日向灘)
(エーエ　日向灘　サテモ　ションガエ)

(ヨイショ〳〵〳〵ナ)
浮いた噂が　(ヨイショナ)
浮いた噂が橋通　(ヨイ〳〵)
月が立てたか　あの夜から
(テサテ　サテ〳〵あの夜から)
(エーエ　あの夜から　サテモ　ションガエ)

(ヨイショ〳〵〳〵ナ)
日向青島　(ヨイショナ)
日向青島日本のハワイ　(ヨイ〳〵)

(雜　錄)

戀の船唄　南風
(テサテ　サテ〳〵南風)
(エーエ　南風　サテモ　ションガエ)

(ヨイショ〳〵〳〵ナ)
行こか詣ろか　(ヨイショナ)
行こか詣ろか七坂越えて　(ヨイ〳〵)
鵜戸のお宮は守り神
(テサテ　サテ〳〵守り神)
(エーエ　守り神　サテモ　ションガエ)

(ヨイショ〳〵〳〵ナ)
誰に逢ふとて　(ヨイショナ)
誰に逢ふとて大淀川の　(ヨイ〳〵)
水はいそ〳〵急ぐやら
(テサテ　サテ〳〵急ぐやら)
(エーエ　急ぐやら　サテモ　ションガエ)

宮崎小唄

作詞　日高不鳴
作曲　杵屋六京

春は神宮の御池の櫻
ヨイ〳〵ヨイ〳〵ヨイトコナ
庭にひな鶴ひめ小松
可愛稚子衆の初詣り
ヨイ〳〵ヨイ〳〵ヨイトコナ

夏は青島蒲葵樹の小陰
ヨイ〳〵ヨイ〳〵ヨイトコナ
涙の花散る磯づたひ
沖には黒潮かつを船
ヨイ〳〵ヨイ〳〵ヨイトコナ

秋は住吉月見ヶ丘の
ヨイ〳〵ヨイ〳〵ヨイトコナ
梢に浮ぶ赤江灘
君を松風そよ〳〵と
ヨイ〳〵ヨイ〳〵ヨイトコナ

冬は一ッ葉老松小松
ヨイ〳〵ヨイ〳〵ヨイトコナ
手に手つないだ夫婦松
日向ぼつこのごぐろ松
ヨイ〳〵ヨイ〳〵ヨイトコナ

霧島小唄

作詞　西山喜久雄

春よ春春　霧島山の
嶺にかすみの薄衣
裾野三里は山櫻
逆鉾　逆鉾　逆鉾さ
春の霧島なつかしや

夏よ夏夏　霧島山の
つゝじや眞盛りどの山も
薫る新緑夏知らず
逆鉾　逆鉾　逆鉾さ
夏の霧島なつかしや
（雜　錄）

秋よ秋秋　霧島山の
すゝきやナヨ〳〵誰招く
夕日火の山紅葉もゆ
逆鉾　逆鉾　逆鉾さ
秋の霧島なつかしや

冬よ冬冬　霧島山の
嶺にや氷柱（ツラヽ）の雪の花
ふもと榮の尾の湯のかほり
逆鉾　逆鉾　逆鉾さ
冬の霧島なつかしや

日向名勝小唄

作詞　松山敏

宮崎神宮

夕べの空を眺むれば
薄れ淡けき森陰に
いとも氣高き御社と
鳥居につづく砂利參道

一ッ葉の松

松は一ッ葉日向の灘の
男波女波の音高く
濱の眞砂に陽の名殘り
盡きせぬ林に上る月

青島

青島いゝとこ誰がいふた
潮が滿つれば離れ島
茂るビロー樹の葉の姿
ほんに南洋に來たような氣がするよ

月知梅

花に戯れ月に醉ふ
日向名樹の月知梅
色とりどりの八重の花
三州一の梅かいな

霧島山

霧の島とは名ばかりで
來て見りや煙の山がある
上には天の逆鉾と
下には御池の水かがみ

鵜戸神宮

鵜戸へ鵜戸へと神詣で
波間へだてたわかれ路の
岩屋にまします神々は
わが日の本の守り神

座論梅

枝に根を生む座論梅
晴れた冬日に鶯が
枝から枝へ書寢して
花の散るよな夢を見る

高千穗峽と神橋

見たか見ましたか神橋で
千丈の谷の水の色
神代ながらの高千穗峽にや
月形日形の岩もある

（雜錄）

稗搗節

（主として椎葉に唄はれる）米がなく稗が主食であつた時代にはこれを自分の臼で搗いて食べることが日課で、コツツン、コツツンと單調な杵のリズームが、この民謡を生んだ。

一、庭のさんしゆの木
　鳴る鈴かけて
　鈴の鳴るときや出ておぢやれ
二、鈴の鳴るときや
　何と言ふて出ましよ
　駒に水くりよと言て出ましよ
三、なんぼ搗いても
　このひや搗けぬ
　どこの御藏の下積か
四、稗は搗いても
　來るこた來るが
　しばし待ちやれおそござる

五、あごまいやばを
　この山奥で
　鳥の鳴く聲聞くばかり
六、戀し小川の
　鵜の鳥見やれ
　鮎をくはへて瀬を上る
七、おまや平家の
　公達ながれ
　おごま追討の那須の末
八、那須の大八
　鶴富捨てゝ
　椎葉立つときや目に涙

九、しばし待ちやれ
　稗搗いてしもて
　お茶を飲ませて抱いてれる

岩戸神樂歌

一、しめひけば
　こゝも高天の原よただ
　集まりたまへ四方の神々
二、嬉しさに
　吾はこゝにて舞遊ぶ
　すまともあけてみすも下さず
三、岩戸出て
　四の光のかわらかけ
　しりくめなわのしろしなるらむ
四、日向なる
　二上岳の麓にて
　ちゝが窟にこたれこそうむ
五、千早ふる
　神のゆかけにそでかけて
　神代のあうと言ふぞうれしき
六、いさぎよし
　はなのひろせて身を清め
　朝日に向ひて神を招する
七、おさめても
　千代のみかぐら舞遊ぶ
　面白かりし末は目出度き
　（以下略）

（雜　錄）

一〇、思ひ戀がれて
　墨するときは
　石の硯が中くぼる

新小唄　宮崎甚句

ハア　モダン宮崎　大淀川の
ハアラヨイ〳〵ヨイヤサツト
橋は橋　橋は橋　若緑
潮路戀しや　潮路戀しや　ソレ
日向灘　ヨーイヤサ
サーサ　ヨイ〳〵　ヨーイヤサー

ハア　水郷延岡　流れに文化
ハアラヨイ〳〵ヨイヤサツト
浮ぶ遊船　浮ぶ遊船　五ヶ瀬川
まれく川風　まれく川風　ソレ
糸柳　ヨーイヤサ
サーサ　ヨイ〳〵　ヨーイヤサー

二

藤澗忠一詩
タイヘイ文藝部曲
おせん

ハア　櫻は軍馬の　千本櫻
ハアラヨイ〳〵ヨイヤサツト
駒もいなゝく　駒もいなゝく　花霞
櫻聯隊　櫻聯隊　ソレ
都の城　ヨーイヤサ
サーサ　ヨイ〳〵　ヨーイヤサー

ハア　雲の霧島　霧島つゝじ
ハアラヨイ〳〵ヨイヤサツト
締めた思ひの　締めた思ひの　錦帶
月の青島　月の青島　ソレ
彌生橋　ヨーイヤサ
サーサヨイ〳〵ヨーイヤサー

ハア　歸る漁船　大漁の旗を
ハアラヨイ〳〵ヨイヤサツト
立てゝ油津　立てゝ油津　梅ヶ濱
鵜戸の宮さん　鵜戸の宮さん　ソレ
岩しぶき　ヨーイヤサ
サーサ　ヨイ〳〵　ヨーイヤサー

昭和十七年十二月二十五日印刷
昭和十七年十二月三十一日發行

宮　崎　縣

宮崎市高千穗通二丁目二番地
印刷人　壹岐晴繁

宮崎市高千穗通二丁目二番地
印刷所（南宮17）平和印刷所
電話（五六四番）（五六五番）

1084